

今回の体育部報は、新任の先生の奮闘記です。今年度、体育部の仲間入りをされた新任の先生方に、ここまでの経験を通して感じていること、大切にしてきたことを書いていただきました。

「やったあ！みんな、できるようになったよ！」

岡崎市立上地小学校 榎本隼大

3年生の本学級では、級訓「ジグソーパズル～31のピース～」を掲げた。「みんなの力をつなぎ合わせて大きな力が発揮できるように」、「一人一人の個性を大切に、仲良くできるように」という二つの願いを込めた。学級会や係活動、授業を通して、一人一人が輝き、主役となれる学級づくりを心がけている。

6月に行ったマット運動の実践では、子供同士の関わりを大切に、授業を進めた。体育での成功体験が少なく、好きではないと言っていた児童Aが、試行錯誤しながら、一生懸命開脚後転に取り組んでいた。児童Aは、回転の勢いが足りず、うまく立ち上がることができなかった。動きのポイントに自ら気付いた級友が、タブレット機器で撮影した動画を一緒に見ながら改善点を探し出す。そして、「まず、少し遠くにおしりをつき、立ち上がるときに、手を『ばんっ』とつく、『すうっ』と立てるようになるよ！」とオノマトペや身振り手振りを使ってアドバイスを送った。互いに高めていこうとする姿がみられた。そのアドバイスを受けた児童Aは、繰り返し挑戦し続けた。授業半ばを過ぎたころ、児童Aの「やったあ！みんな、できるようになったよ！」という大きな声が聞こえてきた。その周囲には、笑顔の輪が広がっていた。

これからも、一人一人の良さを見つけ、認め、励ますことを大切に、全ての子供が自分らしく輝けるように、自ら研鑽を積んでいきたい。



「笑顔」

岡崎市立小豆坂小学校 康本慎吾

今年度、2年生の担任となり、教員人生をスタートさせた。「笑顔のあふれるクラスにしよう」という願いを込め、級訓を「えがお」に決めた。子供も、そして自分自身も「笑顔」を大切にしていきたいという思いがあった。

しかし、いざ始まってみると、そんな思いとは裏腹に、日々の業務だけで疲弊し、笑顔でいることが減っていった。すると、自分を映す鏡のように、子供の笑顔も減っていくのを感じた。そのような現状を内省し、どんなに上手くいっていかなくとも、常に自分が笑顔でいることを決めた。

体育科「ゲーム」鬼遊びでは、タグを使ったオリジナルゲームを考え、教材研究を行った。仲間と協力し合う子供の姿を目指し、ICT機器やチーム学習などを取り入れた。自分のねらい通りにいかないことは多かったが、常に笑顔でいることを心がけた。どんなに小さくとも子供のできたことを褒め、子供と一緒に授業を楽しんだ。単元の学習が終わると、子供から「こんなに楽しい体育は初めてだったよ！」「まだまだやりたい！」という声が聞けた。笑顔で話しかけてくる子供を見て、素直に嬉しく思った。運動を楽しむことが目標の一つである体育科において、教師が「笑顔」を大切にすることは必要だと、今回の実践を通して改めて感じた。

今後も、「笑顔」と自分自身が楽しむことを大切にしつつ、子供たちの学びが深まる授業を目指して、研鑽を積んでいきたい。



## 「学び合いを大切に」

岡崎市立矢作中学校 鷺野祐一

私はこの半年間、日々の授業を一番大切にしてきた。どうしたら一人一人が課題を追究することができるのか、1時間で「できた」「わかった」を感じることができるのかを考え、「学び合い」をキーワードとして、日々取り組んできた。

最初は、授業に対して不安や悩みが多く、うまくいかなかった。悩みながらも、試行錯誤を繰り返し、実践を重ねてきた。授業後に、指導教員の先生や周囲の先生方からのご指導、生徒たちのフィードバックから授業を様々な視点から見直し、授業改善に取り組んでいる。

つい先日の跳び箱の授業では、開脚跳びがうまくできない生徒がいた。何度挑戦しても跳び箱の上に乗ってしまうことから仲間と改善点を探し、学び合いの中で、その生徒だけでなく周りにも生徒もどんどん跳べるようになった。その後、台上前転にも挑戦することができるようになり、学び合いを通して成長を間近で見ることができた。生徒の「できた」という成長に巡り会うことができ、教員としてのやりがいを少しずつ感じることができている。

中学生の段階で、生涯を見通すことは難しいかもしれない。しかし、この時期に少しでも「身体を動かすって楽しいな」「跳び箱って面白いな」と、思うことが生涯スポーツのきっかけにつながっていくと考えている。そのため、限られた時間の中で「もっとやりたい」という姿を多く引き出せるように学び合いを大切にしていく。そして、一人でも多くの生徒が「できた」「わかった」「楽しい」と感じることができるような授業を目指していく。



## 「全力応援団！～できっこないをやらなくちゃ～」

岡崎市立矢作北中学校 茂木瑞恵

体育大会の1年生学年テーマ「全力応援団！～できっこないをやらなくちゃ～」。生徒が主役となって輝く行事であってほしいという思いから、演技実行委員を募り、夏休みから活動がスタートした。「一から自分たちで創り上げる過程を通して、生み出す苦しみ、達成感や喜びを経験してほしい。最後はみんなと一緒に感動の涙が流せたら最高だね。」そんな言葉を掛け、生徒を信頼し、見守る日々が始まった。教師主導からの脱却、これは私の課題でもあった。しかし中学1年生、初めての学年演技。何か一つ決めるにも、想像以上に時間がかかった。話し合いの中で、行き違いや衝突も生まれた。「あなたは どうしたい？」「最善の演技にするために、どうしたらいい？」授業や学級経営、行事においても、生徒が主体的に活動するためには、教師のファシリテーションが重要である。自分の力の未熟さを痛感する瞬間もたくさんあったが、ファシリテーターに徹した。合意形成や振り返りを大切にし、課題を全員で共有しながら、演技内容や構成など、試行錯誤しながら積み上げていった。2学期が始まり、2週間という短い練習期間での、生徒の取組は素晴らしかった。どこまでも意欲的にチームで教え合い、学び合う。実行委員がリーダーとして機能しながら、多くの生徒が放課も教室で練習に励む。正に生徒主体の学年演技が完成し、本番を迎えることができた。「ダンスは苦手だったけど、学年演技を通してダンスが好きになれた。」「実行委員は大変だったけど、苦労した分だけ達成感や充実感を感じた。」生徒の振り返りからはそんな言葉があふれた。何よりも成長を感じたのは、本番前の実行委員の言葉である。「みんな全力で練習してくれてありがとう。私たちに信頼してくれて、ついてきてくれてありがとう。やるべきことは全部やり切った。自分たちしかできない最高の演技を見てくれる人に全力で届けよう。全力で楽しんで、支えてくれた先生たちに感謝の気持ちを届けよう。」これからも、目の前の生徒を全力で支援しながら、生徒とともに日々成長し続けられる教師でありたい。

